

[講演解説]

イリーナ・セダコワ博士およびヤロスラフ・ゴルバチョフ博士の 講演会によせて

野町 素己

北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界」(代表:岩下明裕)は、共同研究のために上記の2名のロシア人研究者を招聘した。これを機会に、本会でもお二人の特別講演会を組織する運びとなった。以下、各研究者及び講演会について簡潔に紹介する。

1. イリーナ・セダコワ「ブルガリアとロシアにおける年中行事:伝統と現代性」

この講演会は2013年2月3日、早稲田大学早稲田キャンパスで行われた。報告者のイリーナ・アレクサンドロヴナ・セダコワ氏は、現在ロシア科学アカデミー附属スラヴ学研究所の上級研究員である。専門はバルカン半島のスラヴ言語文化、主にブルガリアを題材とした民族言語学、社会言語学、フォークロア研究で、いわゆる「トルストイ学派」の研究者として知られている。セダコワ氏はニキータ・トルストイ指導の下で1984年にモスクワ大学で博士候補論文を提出し、2007年には現在所属するスラヴ学研究所から博士号を取得、同年『ブルガリア人の言語と文化におけるバルカンのモチーフ』(2007年)として上梓した。同書は学界で高く評価され、2013年にはブルガリア語訳も刊行されている。

セダコワ氏は、優れた個人研究業績を上げるだけではなく、国際民族学・フォークロア研究者協会やその他の研究団体の重要職を歴任し、モスクワで隔年で開催される国際学会「バルカン研究会」を含めた多くの国際会議の組織者でもある。

さて、上記の講演会は、ブルガリアとロシアにおける民間および公式の年中行事について、特に社会主義体制崩壊前後にどのような変化が起こったか(例えば行事の再構築、復活、再命名、再考案、考案など)を、それぞれの政治的・歴史的・社会的背景を分析しつつ、比較の視点から双方の特徴づけを行う試みであった。

講演会当日は、少人数ながら、本邦のスラヴ・フォークロア研究の第一線研究者が集合し、ロシア、ブルガリアは無論のこと、チェコやスロヴァキア、ユーゴスラヴィアといった旧共産圏の事例も比較材料として長時間論じられるなど、白熱した討論が展開された。

尚、2月6日(水)には、北海道大学スラブ研究センターにて「地域・民族言語学に照らしたブルガリアの中の境界:クリスマスと出産にまつわる儀礼」と題された講義が行われた。こちらはトマシュ・カムゼラおよび野町素己共編による『バルグレイヴのスラヴ諸語、アイデンティティ、境界のハンドブック』に掲載される予定なので、改めてご期待頂きたい。

2. ヤロスラフ・ゴルバチョフ「歴史的に動機づけられた初期歴史的スラヴ語動詞の分類」

この講演会は3月29日(金)に行われた日本スラヴ学研究会の特別講演として位置づけられていた。報告者のヤロスラフ・ゴルバチョフ氏は、シカゴ大学スラヴ語スラヴ文学科の助教授である。ゴルバチョフ氏はハーヴァード大学出身の歴史言語学者で、著名な言語学者ジェイ・ジャサノフの指導の下、2006年に博士号を取得した比較的若い研究者である。専門は歴史言語学、インド・ヨーロッパ語比較文法、ゲルマン諸語、バルト諸語、スラヴ諸語研究、文字論と幅広く、現在は特にバルト諸語とスラヴ諸語の比較形態論およびアクセント論に取り組んでいる。

今回の講演会では、氏の博士論文「ゲルマン諸語、バルト諸語、スラヴ諸語におけるインド・ヨーロッパ起源の鼻母音を有する開始相の動詞群」(Brill社より近刊)に続く2冊目の研究書として計画されている「インド・ヨーロッパ祖語からスラヴ祖語へ：動詞形態論」からの内容をお話いただいた。たいていのスラヴ語学者は専門分野に関わらずインド・ヨーロッパ諸語比較文法のある程度の基礎的な知識を持ち合わせているが、その最先端の研究成果を踏まえてスラヴ諸語比較文法あるいはスラヴ祖語研究に取り組んでいる者は多くない。ゴルバチョフ氏は、そのような数少ない研究者の一人であり、第一に歴史言語学を専門とし、あくまでもその視点からスラヴ語を研究している点が特徴的であろう。

本講演でも、インド・ヨーロッパ諸語比較文法の最新成果を踏まえ、古期のスラヴ諸語の動詞分類について、共時的、通時的、意味論的な局面から新たな分類方法が提示されていた。明確な問題設定、深い専門的知識に裏打ちされた説得力ある議論の展開、例えばレスキーン、ディールス、ヤコブソン、ラント、シェンカーといった錚々たるスラヴ語学者の研究を正面から吟味し、適切に批判していく姿勢は、本邦の第一線で活躍される研究者はもとより、同世代の若手研究者にとって特に大きな刺激になったようである。

両講演会の組織に際し、長與進氏(早稲田大)はいつもながら惜しみなくご協力くださった。心よりお礼申し上げます。